



# 工学の父，山尾庸三

Yozo Yamao, Father of Engineering

(独) 工業所有権情報・研修館 理事長

三木 俊克  
Toshikatsu MIKI

Chairman, National Center for Industrial Property  
Information and Training

昨年 10 月に INPIT に着任しました。「特許研究」の読者の皆様にはますますご清栄のこととお喜び申し上げます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

今年の NHK 大河ドラマは「平清盛」だそうだ。昨年 9 月末に東京に引っ越してからテレビを見る時間がめっきり減ってしまい、今年からスタートしたこの番組を見る機会も未だない。清盛の時代は、政治力を失っていく平安貴族たちと新たに台頭した武士たちの関係、さらに台頭する武士群の間の争いというふうに歴史が大きく動いた時代で、そのなかで織りなされた人間模様が大河ドラマとしての魅力を生み出すのだろう。僕もいずれ DVD で見ることになるだろう。

ところで、清盛という名前を聞いて多くの人は何を想起するのだろうか。貴族の没落と源平の争いを想起する人も多いだろう。筆者も高校時代に「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり・・・おごれる人も久しからず」といったフレーズをなんとなく覚えたのを思い出す。しかし高校生だった自分にとってもっと印象的だったのは、清盛が平安期の半鎖国状態を脱して日宋貿易を展開し、当時の都さえ移したということであった。「これはすごいエネルギーだな」と感じたときのことをいまも思い出す。筆者の高校時代はかの東大安田講堂事件の前夜であり、当時の高校生は、変革や変革者という面でものごとを見るようになっていたのかも知れない。

振り返って日本史を眺めると、開国と半鎖国の 2 つの波の繰り返しであったと思う。卑弥呼の時代の朝貢貿易、飛鳥・奈良政権時代の遣隋使・遣唐使、平家政権時代の日宋貿易、足利政権時代の日明貿易、織豊政権時代の南蛮貿易、明治以降の世界貿易、その間には、平安期、鎌倉期、江戸期の半鎖国期があるといってもよかろう。対外貿易では対中国王朝との朝貢貿易、明治 40 年代までの不平等条約下での貿易など、必ずしも対等な条件で貿易が行われたわけではなかったが、こうした開国と半鎖国の繰り返しがこの国の姿、文化やそれを担う人々の形成にも大きく影響を与えてきたように感じている。江戸末期から明治期にかけての開国は、この国の幾多の開国の中でもっともドラスティックなものと言えるだろう。今回は「特許研究」の貴重な紙面を使わせていただき、明治開国のときを生きこの国の骨格づくりに影響をもたらした先人の一人、山尾庸三のことを紹介したい。

山尾庸三（天保8年生；1837年生）は長州藩の人である。明治維新前後の長州人としては、大村益次郎、吉田松陰、久坂玄瑞、高杉晋作、木戸孝允、伊藤博文、井上馨などが多くの人に知られているが、山尾庸三は生真面目かつ凝り性の人だったようで、そのためか、世間ではあまり知られていない人でもある。山尾庸三は、志道聞多（後の井上馨）、伊藤俊輔（後の伊藤博文）、野村弥吉（後の井上勝）、遠藤謹助と共に、幕末1863年に密航という形ではあるが長州藩の命で英国に渡る。世に言う“Choshu Five”である。“Choshu Five”は皆20代の若者であり、渡英後はロンドン大学で勉学する。井上聞多と伊藤俊輔の2名は、長州藩に砲撃された連合国の決意に関する報道に驚き、翌年（1864年）には帰国するのであるが、残りの3名は引き続き英国で勉学に励むこととなる。山尾庸三は、その後、スコットランドに移り、昼間はグラスゴウのネイピア造船所で働き、夜はアンダーソンズ・カレッジで造船、製鉄、炭鉱などについて学ぶ。

明治元年（1868年）に山尾庸三は帰国し、「工業の振興」に奔走する。特に、工部省の設置（明治3年）、人材育成をする工部大学校の設置（明治3年の開校当初は工学寮、明治10年に工部大学校に改称）における山尾庸三の力は大きかった。当時は世界各国で工学は学問的な地歩を固めつつある段階にあり、工学に関する総合的な大学は英国においてさえ実在していなかった状況だったという。こうした中での山尾庸三の先見性には目を見張るものがある。また、明治9年には工部省に工部美術学校が開設される。山尾庸三には「工業デザイン」という考えがあったのではないかと推測される。さらに、明治12年には、工部大学校卒業生を中心に日本最初の工学系学協会である「日本工学会」が設置されるが、山尾庸三は、大正6年（1917年）にその生涯を終えるまで、日本工学会の要職を務めている。なお、我が国の工業所有権制度100周年（昭和60年；1985年）のときに選ばれた十大発明家の1人である高峰讓吉博士は、工部大学校の第1回卒業生とのことである。

このような足跡により、山尾庸三は「工学の父」と呼ばれる。「工学の父」は「発明の父」でもあろう。また、山尾庸三は、英国留学の際に聾啞者が健康人とともに能力を発揮していることを肌で感じ、技術だけでなく「人間の自立」がそもそも大事と考えたのだろう。明治4年の盲啞教育のための学校設置に関する建白書提出を皮切りに、我が国の盲啞教育の充実に尽力した。そして、大正4年（1915年）に日本聾啞協会が設立されたときには、総裁に就任している。

山尾庸三のご子孫にあたる山尾眞理子氏は、いまでも山口市秋穂二島の地におられる。もう10年くらい前になるだろうか、筆者が山口大学に奉職中のある日、山尾家をお訪ねし山尾眞理子氏と児玉光汎氏にお会いしたことがあった。そのとき、かなり無理を言って山尾庸三が晩年に読んだと思しき書籍類がある小屋裏にも上がらせてもらった。そこには、山尾庸三の筆になると思われる一片の和紙が挟まれた本もあり、それを手にしたときの印象はいまも鮮烈に残っている。筆者が山尾家を訪ねた頃と前後して、山尾眞理子氏と児玉光汎氏は「秋穂村塾」と称する活動を展開され、いまでも若い人の活動を支援されている。筆者は「秋穂村塾」に十分な協力もできないまま、昨年9月末に山口から東京の地に移ることとなったが、東京に移った後も、山尾庸三の「思い」や「足跡」を知ってもらいたいと思い、いまの職場の同僚にも関連書籍をお貸して読んでもらったりしている。

この度は「特許研究」の巻頭言についての寄稿依頼があり、この機会を活用して山尾庸三の簡単な紹

介文を書かせてもらうこととした。さらに詳しくお知りになりたい読者の方には、下に掲げた「参考となる書籍」を直接お読みいただきたい。当時の息吹が伝わってくるだろう。江戸末期から明治時代という国の大変革の時代にあって、人づくりと産業発展の礎を築いた山尾庸三、こうした先人から我々は多くのことを学ばねばならないと思っている。

**【参考となる書籍】**

- 1) 兼清正徳『山尾庸三傳：明治の工業立国の父』（山尾庸三顕彰会，2003年）  
本書の入手については、山尾会館（<http://wownets.net/yamasa/kenkou.htm>）で調べてください。
- 2) ヘンリー・ダイヤー（平野勇夫訳）『大日本：技術立国日本の恩人が描いた明治日本の実像』（原タイトル：Dai Nippon the Britain of the East a Study in National Evolution）（実業之日本社，1999年）
- 3) 松野浩二『その後の長州五傑』（東洋図書出版，2011年）